

花田晃治教授退官によせて



ありがとう！ 35年間の新潟

花田 晃治

昭和43年に30歳で新潟にやってきてから35年。新潟において楽しい時を過ごすことができ、大いに満足しています。ほんとうに長い間、ありがとうございました。

官舎があると言われて来てみるとそんなものではなく、事務の方がやっと見つけてくれた長屋のアパートは沼垂の日活ポルノ映画館裏の薄汚い小屋でした。新潟には学生さん以外の所帯持ちを対象とするアパートなどほんのわずかな時代でした。3月末の転勤時期まで待ったうえに方々探し回りやっと見つけてくれたのは、今ではRoyal hostの向かいのメガネスーパー裏、鳥屋野のアパートは周りのドブから蚊が沸き立っていました。アパートの前の道は砂利でした。ただし、ここにおばさんが売りに来る南蛮エビは非常に安く、おいしく、驚くことにわずかなお金で山のようにありました。スーパーなどない時代ですから、野菜もこうしたおばさんから買っていました。東京では高い駐車料金を払っていましたが、ここでは庭で車庫証明がとれました。毎朝、テレビの天気予報を見て、どうして東京じゃなくて新潟から始まるんだ、と東京気分が抜けきらずにいました。その後、やっと小金町の大学官舎に入れてもらえましたが、プレハブの二棟続きで隣の怒鳴り声や泣き叫ぶのが筒抜けでしたし、トタン屋根は夏にはフライパンをコンロにかけた状態で、冬には凍るように寒く、寝ていると隙間から雪が降ってきました。官舎の周りは砂漠で雪の中にすぐに埋まってしまう自動車を掘っていました。お酒を飲んだ翌朝は車がなく、古町十字路でバスを乗り継いでの通勤

は冬には2時間ものでした。

病院事務の方々とは5時を過ぎるとほとんど毎日が宴会でした。当時は、寒梅は二級しか飲まん、それでも水のような、と言って灘のお酒を飲んでおられました。越乃寒梅がこんなに有名になる、ずーと前のお話です。のんびりした時代で酒の肴は昼休みにテトラポットのところで釣ってきたサヨリなどが並んでいました。古町の飲み屋さん「多夢良」。寒梅がまだ有名でなく、売れない頃に無理矢理頼まれて店に置いてあげたそうです。ところが急に有名になって品不足になっても今までのご厚情を思うと断り切れずに卸してくれていました。そんなおかげで寒梅が東京で有名になっておみやげに持ってゆくときに、このオヤジさんのところから数本づつもらってゆきました。ほんとうによくできたオヤジさんで「俺は酒飲まんからわからん。こんなものがそんなにいいのか。好きなだけ持ってゆけ」と言ってくれました。

三越デパートは、まだ小林百貨店と小林映画劇場とあっており、榎谷小路と西堀通、東堀通との交差点は夕方になると、黄色と赤の点滅になり驚きました。116号線も北への道路も街を出ると砂利道でした。追い越しも割り込みもしない、おとなしいドライバーばかりだ、と東京から来た神風ドライバーには映りました。車の運転は雪道3年と言われ、飛び込んだり、回転したり、埋まったりして、慣れるにはやっぱり3年かかりました。

1歳過ぎの娘は東京での肉食から、いきなり魚好きになり、自転車の後ろに乗せて売りに来るおばさんから魚を買い、お米のおいしいのにも驚き

ました。枝豆は、こんなにうまいものがあるのか、とビール一杯とが夏の楽しみとなりました。夏と言えば、枝豆、ビール、甲子園の高校野球ですが、新潟の高校は当時は夏も北信越大会があり、なかなか甲子園には行けず、やむなく出身地の愛知県高校を応援していました。魚、米、枝豆などのおいしさには驚きましたが、もっとおどろいたのは、たまねぎも玉子もなくトンカツ3個がゴロツとのっているだけのカツ丼、すまし汁に麺とナルトだけが入っているラーメン、すき焼は豚肉だと牛肉の置いてない肉屋（今ではすっかり古くなってしまい肉屋とはとても思えない学校町の中野肉屋は、すぐ上の看護婦宿舎の隣に外人宿舎があったそうで、その人々のために牛肉を置いている、新潟では唯一の店でした）、フノリの入っているめるめるしたソバをわさびではなく和辛子で、刻みねぎでなくアサツキをかじりながら食べることなどなど、この世のものではないほど驚きました。

病院の新患当番では、お年寄りの新潟弁がわからず、さらには沼垂弁に北蒲ことばなどなど、看護婦さんに通訳してもらいました。「口の中に草が来た」ってわかりますか。腐って腫れたということだそうです。ただし「先生様」とよばれて最敬礼されるのには驚きましたが、悪い気持ちはしませんでした。スタッフ不足から病室の宿直もしました。歯学部附属病院にはまだ病室も当直室もなく、借りていた医学部附属病院病棟6階の耳鼻科病室の一角で患者さんの隣のベッドに寝て、ガンの痛みにうなされる患者さんの声に一睡もできない夜もありましたし、回診にゆくとこんな人知らんとベッドの上で背中をこちらに向けられました。医局、外来は元医病病室、私の講師室は元病棟の浴室兼炊事場でした。高い天井の屋根裏からはダニがぱらぱらと落ちてきました。

懐かしい思い出を書き始めると際限がありませんが、もっとも印象に残っていることの一つをご紹介します。

記念すべきこと：ビーチサイド・コンパ第一号

(歯学部学生発行おやしらす'96)

1970年7月7日。歯学部1回生の学生さんがまだ5年生の頃。

プレハブの研究室も壁も屋根もトタンが夏の日

に焼けて、それはそれは暑かった。梅雨明けの夕日が日本海に落ちる頃、夏休み前の実習も一段落し、矯正学教室主催の納涼会が金衛町の浜茶屋前の砂浜（今よりはずっと広がった）で始まった。大勢の学生さん、看護婦さん、総勢50数人はいた。当時はまだ、今のようなアルミ樽はく、裁判所裏の松本酒屋から重い木製のビール樽を学生さんが担いでくれた。一度冷やすとかなりの間、冷たく飲めた。ただし当時の主流は日本酒。夕日に染まっていたみんなの顔は、ビールとお酒でもっと赤く燃えた。これが、新潟浜での浜コン第1号（当時は私が命名してビーチサイド・コンパと呼んだ。この方が響きがいいと今でも思っている）、記念すべき時である。その後、医学部の医局が隣でやっていたりして、だんだんとその意義を理解する人々という大げさだが、要するに新潟のきれいな夕日を浴びてビールを飲む、という単純な喜びが最高であることがわかってきて、市民の間に浜コンは浸透していった。

ビール、お酒がなくなるとみんなは帰ってゆき、後には学生さんと私だけが残った。砂浜に落ちている流木を燃やし、ファイヤーストームが始まった。意味不明のことばを歌い、たき火の周りを踊り続け、そのうちに新しい電信柱まで燃えていた。そして12時まで続いたとも1時になってもやっていたとも。

翌朝、ガンガンする頭痛と医局で鬨っていると、一人の学生さんが真っ青になって飛び込んできた。

「浜茶屋のおじさんが事務へ怒鳴り込んできた」「しまった。タベなんかやったっけ」「どうして歯学部だってわかったんだ?」「一部始終を見られたか」「酒屋にいった酒買っただけのしつけもらってきて」

そして浜茶屋で「昨夜はうちの学生がご迷惑をおかけしましたそうで」「おめーも仲間に入ってたよ」とおじさんの目が言っている。キャンプファイアの炭山のなかに真っ黒に焦げた電柱が転がっていた。この夏、外灯の柱にするために山から運んできてあったものを燃やしたという。ボートも一艘なくなっている、と聞いて青くなつたが、これは後でテトラポットの陰で見つかった。

こうして電柱と運搬賃という高い代償を払い、「元祖ビーチサイド・コンパ」の名誉だけが残った。

ご退官おめでとうございます

新潟大学大学院医歯学総合研究科長 山田好秋
新潟大学歯学部長

花田先生、ご退官おめでとうございます。26年の永きにわたり新潟大学歯学部・歯学部附属病院、そして大学院医歯学総合研究科の発展に尽くして頂きありがとうございました。先生はこれまで歯学部歯科矯正学講座、そして現在では大学院医歯学総合研究科咬合制御学分野の教授として教室の運営ならびに教室員の指導に当たられるかたわら、歯学部長、附属病院長、大学院医歯学総合研究科長、新潟大学評議員、さらには新潟大学学長補佐等の重職を歴任され、歯学部・歯学部附属病院はもとより新潟大学大学院医歯学総合研究科そして新潟大学全学部発展に尽くしてこられました。また、日本矯正歯科学会会長を2期4年にわたり務められたほか、日本歯科医学会、日本歯科医学教育学会、日本顎変形症学会、日本口蓋裂学会、日本顎関節学会、さらには日本歯周学会の役員を歴任し、歯科医学の発展にご尽力下さいました。世界的にもWorld Federation of Orthodontistsの役員ほか、Asian Pacific Orthodontics Societyの設立など、幅広くご活躍頂き、新潟大学の名を広めて頂きました。臨床面では、顎変形症、唇顎口蓋裂の患者さんの治療に対するチームアプローチを推進し、先端的かつ高度な診療体系の基礎を確立して下さいました。研究面でも、生理学、組織学、生化学、補綴学、歯周病学、放射線学の分野と連携して独創的な研究を推進し、我が国を代表する

歯科矯正学講座としての地位を築いて下さいました。これもひとえに従来の枠組みにとらわれない柔軟な発想と幅広い視野を兼ね備えた先生の的確なご指導によるものであります。

大学の改革が求められたこの数年、学部長として「3年次編入」「帰国子女の受け入れ」「大学院社会人入学」等、多くの新しいシステムを導入され、学部の基礎を固めて頂きました。大学院部局化においては、文部科学省との折衝を通じ、全国初の大学院医歯学総合研究科を創立されたことが、旧六を始めとする大学の大学院部局化のモデルとなったことは、独立法人化後の歯学部を導く大きな功績となっております。

新潟大学の国際化にもご尽力下さり、多くの留学生を受け入れられ、歯学部だけでなく新潟大学の名を世界に広められました。この実績をもとに中国、フィリピン、バングラディッシュ、メキシコ、タイ、ルーマニア等、多くの国の大学と姉妹校協定を締結して頂き、共同研究、セミナーなど実りある研究交流を実践されてきたことは、大切な財産でもあります。独立法人化を機会に、大きな変革が求められている現在、重鎮である先生が大学を去られたことは歯学部にとって大きな痛手ではありますが、今後とも我々のためにご意見、ご提言をいただけますよう切にお願いいたします。長い間本当にありがとうございました。

花田晃治教授の退官に寄せて

新潟大学医歯学総合病院 副病院長 宮崎 秀夫

花田晃治教授の定年退職にあたり、長年の新潟大学、新潟大学医歯学総合研究科への教育、研究、臨床におけるご貢献に対し、まずもって心より感謝申し上げます。

花田晃治教授は、東京医科歯科大学の助手を経て、昭和44年4月1日に新潟大学歯学部附属病院矯正科講師に赴任されました。その後、昭和52年に教授に就任され、昭和56年に病院長、平成10年には学長補佐、平成11年からは歯学部長、平成14年からは、新潟大学大学院医歯学総合研究科長など要職を歴任されました。一方、専門の矯正学分野では日本矯正歯科学会の会長をされ、その他にも日本口蓋裂学会学術委員、日本口腔外科学会評議委員、日本顎関節学会評議委員、日本歯周病学会の理事を歴任され、日本の歯科臨床をリードし続けてこられました。

先生は新潟大学歯学部を、また、新潟の土地をこよなく愛していらっしゃいます。新潟という地方都市にあって、いつも「いかにして患者様を幸せにできるか」を考えてこられたと思います。その成果は、成人歯科矯正や外科矯正治療のパイオニアとして、我が国の矯正治療発展への多大な貢献となって表れました。同時に、多くの若い歯科

医師に歯科矯正学・矯正治療参入への高いモチベーションを与えることになりました。全員の名前と顔を識別できるのだろうかと思わせるほど数多くの医局員や大学院生、留学生を抱え、親分としての仕事もきっちりこなしていらっしゃいました。結果として、法人組織となった現在、病院の経営安定に寄与していただいておりますこともお礼を申し上げなければなりません。

先生とは8年と3ヶ月の短い期間しかご一緒できませんでしたが、その間いろいろなことを教えていただきました。教授会や附属病院運営委員会などで、諸問題を解決してゆかれるロジックの確かさ、最短経路でよりよい方向へ導く合意形成の方法などは非常に勉強になりました。私が平成15年に歯学部附属病院長に就任した際には、医学部附属病院との統合という大変な時期ではありましたが、ターニングポイントではいつもの確なアドバイスをいただき、まがりなりにもなんとか円滑に運営することができました。現在、大学法人となった医歯学総合病院の運営は全く手探り状態です。今後とも、ご指導いただけますようよろしくお願いするとともに、先生のますますのご発展を祈念いたします。



花田晃治教授の最終講議を終えて

咬合制御学分野 森 田 修 一

花田晃治教授の最終講議が、「花田 新説歯科矯正学とともに三十五年」と題して、平成16年3月4日午後4時より、有壬記念会館で行われました。この最終講議は、新潟大学大学院医歯学総合研究科咬合制御学分野と新潟大学歯学部歯科矯正学教室同門会が企画し、新潟大学歯学部同窓会のご後援を得て盛会裡に開催できましたことに対し厚く御礼申し上げます。

「花田 新説歯科矯正学とともに三十五年」と題する最終講議は、4部構成になっていて、第1部が「温故35年」と題して35年間に渡る講議の変遷と講義録「花田 新説歯科矯正学」の紹介でした。これを印刷した平井印刷所のご好意で講義録を無料で用意したのですが、すぐに売り切れてしまいました。第2部は平成15年度歯学部4年生の学生さんによる授業の中で学生さん同士で投票した結果、最優秀賞を獲得した「外科的矯正治療」の授業を4年生の尾田昌之君、加賀美慶君、風間敦史君、金子正幸君の4名が行いました。授業終了後、4名には表彰状と副賞の図書券が送られま

した。第3部は「顎変形症の外科的矯正治療について」と題して、これまで治療してきた患者さんのこと、これらの患者さんから得られた資料を基に築きあげて来られた成果についてお話されました。第4部は「日本人のルーツを求めた旅」と題して、1982年から始まった、ペルー、中南米、北米、中国と続いた旅での見聞録を披露され、非常に感動するものでした。その後学生、ラカーブの小野さん、教室員からの花束の贈呈がありました。

最終講議修了後、有壬記念会館の1階において懇親会を開催しましたところ、多数の皆様のご参加をいただき、楽しい会になりました。会を始めるにあたり山田研究科長よりご祝辞をいただき、宮崎副病院長のご発声による乾杯で開演となりました。多くの大学関係者、同窓会員、同門会員のご参加を得て、予定の時間も瞬く間に過ぎてしまいました。

最後に、最終講議にご参加いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

